

令和3年度

読書感想文コンクールを終えて

毎年行われてきた本校の読書感想文コンクールですが、昨年は新型コロナウイルス感染症の影響で中止となりましたが、今年は無事に第45回を迎えることができました。応募作品は1年生192編、2年生203編、3年生7編、合計402編ありました。その中から、教育支援センター運営委員会の教員10名と国語科の教員3名が慎重に選考し、次のように6名の入選作を決定しました。この結果については、1月5日の全校集会でもお知らせしましたが、以下にその学生の氏名と作品名を掲げ、榮譽を称えたいと思います。

また、惜しくも入選とはならなかったものの、選考の過程で佳作として特に優れた評価を得た24名の学生も併せて紹介します。

最優秀賞

情報工学科3年 杉山 咲 「幸せな結末」とは

優秀賞

情報工学科3年	石村 涼介	徹底的な美の追求
物質化学工学科2年	寺田 歩生	「ジュラシック・パーク」を彩った描写たち
機械工学科1年	橋本 琳	親と子供の価値
情報工学科1年	鄭 佳音	平凡と非凡
物質化学工学科1年	原田 綾音	河童の目で - 「河童」を読んで -

佳作

1 M 石田 眞子	1 S 馬場 光希	2 E 小川 弘登	2 I 片岡 春陽
1 M 南崎 壽伸	1 I 水原 純	2 E 北田 恵裕	2 I 玉垣 勾瀆
1 E 岡野 響	1 C 安養寺伶央	2 E 長辻 彩花	2 C 藤井 陽
1 E 木村 要一	2 M 桑原 幸汰	2 S 滝澤 嶺真	(非 公 表)
1 E 松永 真輝	2 M 田丸涼太郎	2 S 前村 峻斗	3 I 井原 実咲
1 S 安藤耕太郎	2 M 中嶋 勇介	2 S 宮野 博雅	3 C 原 朱眸

《最優秀賞について》

3 I 杉山咲さんは、川村元氣「世界から猫が消えたなら」を読んで書いています。杉山さんは、簡潔に話の全体を紹介すると、すぐに本題の「思い出」に焦点を当て、そこから自分自身の記憶へとつなぎます。そして主人公と比較し、今の自分が置かれた状況を捉え直します。主人公にとっての「思い出」が果たす役割を読み解き、その人の個性だけでなく将来の進路にさえ寄り添うことになるモノたちにも留意しています。様々な記憶とふれあい直すことで限られた余命に絶望することしかできなかった主人公が、死と折り合いをつけていく姿から、杉山さんはもう一度自分の生を、自身の周りのモノたちを見つめ直します。そして、人生のいちばん近くにおいて幸せにつないでくれる大切なものを再発見しています。結びまで読みなく、時そのものを感じるような思いで読みました。

《優秀賞について》

3 I 石村涼介さんは、川端康成「雪国」を読んで書いています。石村さんは、作者の描く世界の美しさとその表現上の工夫に注意しています。まずは暗示的表現、「指」「トンネル」「汽車」「雪」などはすべて暗喩なのではないか、と石村さんは考えます。美の邪魔になりかねない明示的な性的表現を避けるための工夫としての、と。結末の「火事」についてもまた、情熱こそが身を滅ぼすことの暗喩なのだと。こうした作者の工夫について謎解きをするような読み方を大変興味深く思いました。

2 C 寺田歩生さんは、クライトン「ジュラシック・パーク」を読んで書いています。映画から原作へと遡っただけでなく、中学時代はテーマに注目して読んでいたのを今回改めて描写とその細かさに注目して読み直しています。映画とのいちばんの違いである言葉、寺田さんはとくにその精密描写に魅せられて具体的に表現を拾っていきます。その緻密な手つきは、マイナーであれ創作であれ「登場させなくても全く問題ない恐竜」など一頭たりともいないことを知っている者の真骨頂ともいえるでしょう。

1 M 橋本琳さんは、太宰治「桜桃」を読んで書いています。「子供より親が大事、と思いたい」という言葉をめぐって、どうしてその言葉に引っかかりを覚えるのか、作者と主人公「私」を重ねながら自分自身の問題としても考え、夫婦や親子のあいだにある心の機微を読み解いていきます。引け目、罪悪感、気まずさ、自己防衛。最後に橋本さんらしい独自の解答が提示されているのも、高い評価の一因となったと思います。

1 I 鄭佳音さんは、ドストエフスキー「罪と罰」を読んで書いています。殺人を犯した者の罪の意識について、また凡人と非凡人を分ける選民思想について考えた鄭さんは、非凡人であれ罪は免れないと考えたこと自体が、自分が凡人である証拠だと思えます。また、自分は非凡人だと主張する凡人にすぎないことを認めざるを得ない主人公の絶望にまで思いやります。この名作・大作に真っ直ぐに向かい合おうとした果敢な姿勢が文章からにじみ出ています。

1 C 原田綾音さんは、芥川龍之介「河童」を読んで書いています。河童の国と人間の国との違い。餓死や自殺のない世界は感傷のない世界であり、おなかの中の赤ちゃんは生まれてきたいかどうかを尋ねられ、その気がなければ生まれません。どちらも「完全に正しい」とは思えない原田さんは、人間社会やその常識について「時々一度立ち止まって、河童の目で見つめ直」してみようと思う、と結んでいます。

《全ての学生に向けて》

コンクールに参加してくれた皆さん、大変お疲れ様でした。ドキュメンタリーであれフィクションであれ、それが改めて作られた「作品」となったものに対して、私たちはときに実世界に対して以上に心を動かされたりします。そしてその感動を誰かと共有できたらと願うときに、それをたとえば言葉にしてみたいと思うのではないのでしょうか。その作品と自分はどう絡んだのか。書くことは話すことほど簡単ではないかもしれませんが、書いたものを読み直し、推敲し、清書する流れの中で、皆さんが感じ、思い、考えたことが、きっと自分でもより明確になってくると思えます。

来年度のコンクールも今年度以上の主体的な応募による力作を期待しています。

(国語科・武田)